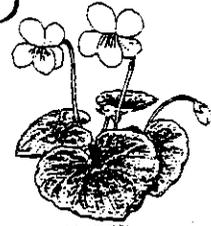


HAT-J 北海道支部だより

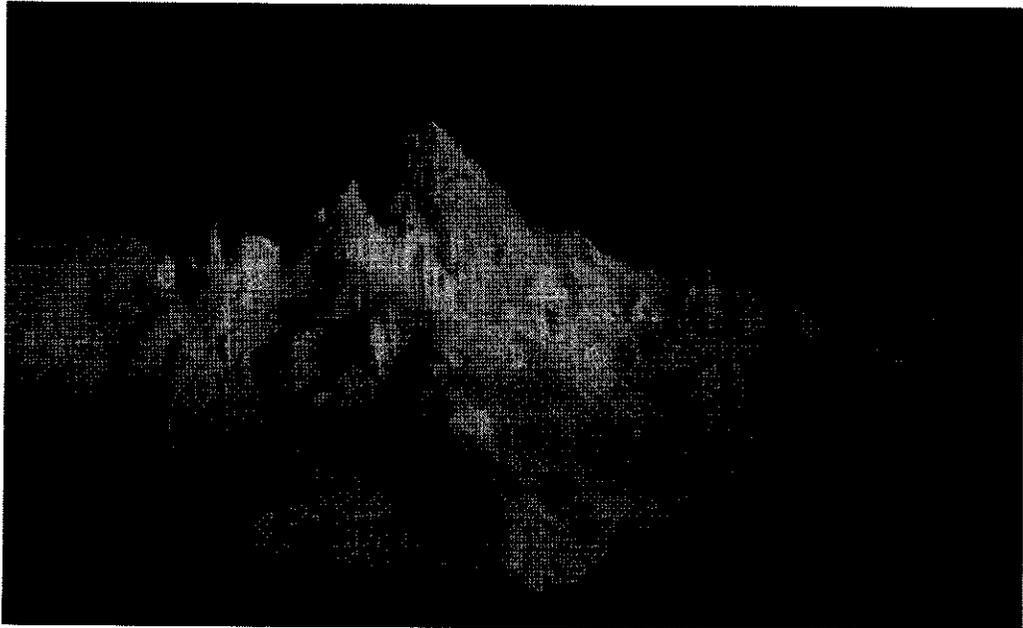
日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト

しれとこすみれ

第 2 号 1997年12月20日



シレトコスミレ
FALLOU 加藤重
1988



利尻山 (南陵1200Pより)

写真と文 五十嵐 辰美

日本最北端の利尻山は、海中から槍の穂先が天を突くように飛び出し、1721mの高さの山頂岩峰を中心に四本の主稜線を形成する。とりわけ南陵の登山人気は高く、1200mから見上げる利尻山 (南峰) は、ローソク岩や大槍そして南峰バットレスと南峰のピークが一望できる。

厳冬の利尻は、あたかも日本の山とは思えぬ程に変貌し外国の山陵とひけをとらない。この美しさに魅了され多くの登山者が、言葉で言いつくせぬ感動をおぼえる。

百名山としても秀峰の名に恥じない山であり、ひと昔前までは海外登山を目指す多くの岳人が登攀技術の仕上げの場として、利尻山に登り海外に旅立っていった。

私の心の中に、神聖な山域で自分だけの聖地と呼べるとすれば利尻山々頂を望めるこの地点をまず無条件にあげる。

またいつの日か、このかけ替えのない聖地を訪ねたとき、変わらないで迎えてくれるには、HAT-Jの輪を更に大きく発展させ、自らが行動を起こすことである。

第1回りんご植樹ツアーに参加して

増子 麗子

平成9年2月5～16日、本部主催によるA、Bの2コースに分かれたネパールりんご植樹ツアーが企画されました。私はAコースに参加しました。第1回ツアーですが、昨年福島の方が中心となり50本の苗木が植樹されて、今回第2回目となります。

関西空港より、カトマンズへ。カトマンズではHAT-J会員でこのりんごプロジェクトの日本とネパールの間をとりもって下さっている、カトマンズ在住の大河原由起子さんに出迎えていただき、その後も私達を案内、同行して下さい。思いがけずルクラに積雪があり出発が1日遅れるが、ヘリがルクラに到着し外に出ると思わずキレイ……！素朴な村の佇まいと山脈そして白銀の世界、村の子供達はソリや竹を半分にした様な物を足に付け滑っている。イヨイヨ憧れのネパール街道へ私は来てしまったのだ。植樹予定地、チョブルンに着くとどこで聞き付けたのか、苗木をもらおうとする村人達が大勢集まって来た。当初は各班に分かれて村人宅を訪れ、今年の苗木の生育状況と、新しい苗木の植え付けが行われる予定であったが、行程が1日遅れた事と、積雪のため断念し集まった人達に植え方を指導し苗木を配る事にした。苗木を渡した人には名前を書いたカードを提出してもらい、誰の所に何本渡ったか記録される。翌日は残りの苗木をチョブルン村長さん宅の畑へ、皆で記念の植樹をし、トレッキングへと出発。途中りんごの苗木が新しく植えられた畑を見たり、村人達に声をこけながら進み、クスムチャハンでA、B班別行動となり、日本での再会を約束して別れる。

エベレスト街道トレッキングの始まりです。雪の積もった道を進むとゴミがチラホラ、私



はいつもの習慣で拾いながら歩く。すると、「ここはきりが無いんでうよ」との言葉。

「今日は雪が降ったため目立たないのです。雪がなくなると、下からは拾いきれないほどのゴミが出てくるんですよ。」それでも目についた物は拾いロッジで焼却してもらう。ラーメンの袋がよく落ちている。どうしてラーメンの袋が落ちているのか不思議だったので尋ねると乾燥したまま歩きながら食べそのまま袋は捨てるのだと言う。日本では、ラーメンはお湯で柔らかくして食べるものと思っていたので驚きである。又、飴、菓子の袋も多く、こういったゴミは現地の人達がゴミを拾う習慣がないため外国人が与える菓子などの袋を中身を食べてその場で捨てるのだそう。実際出会った子供達にお菓子をあげると、私の目の前で捨ててしまった。捨ててはいけないと教え拾わせる。しかしその後どうなるのか……。

ゴミを持ち込んでいるのは我々外国人なの

である。それを実感した時、やりきれない気持ちでいっぱいになりました。SPCC (Sagarmatha Pollution Control Committee:サガルマタ環境汚染管理委員会の略) が育てている松の苗床や野菜畑も見学。松の緑の若芽が育っていました。又、ルクラの町角にはゴミを捨てるドラム缶が設置されていて、HAT-Jで建設された焼却炉で処分されていました。

この美しい山が、村がいつまでもこのままであってほしい。私達がりんごを植える事によって村の人々に少しでも潤う事とエベレスト街道から少しでもゴミをなくす事が出来ればと願わずにられません。

りんごが実を付けるには十年近くかかる事の事ですが、私達が植えたりんごが実を付けた時又、ネパールを訪ねたいと思います。

【緊急報告】 NAP-J発足会に参加して

HAT-Jの事業の一つとして取組んできた、ネパールへのりんご植樹事業が、組織を発展的に改組し新たにNAP-J (アップジェイ:NEPAL APPLE Project Committee of Japanの略) を発足させ、この機構の中で従来やってきた管理運営、資金調達、現地指導・監督、そして事務局の役割を分担していくことになりました。

他には、これまで本事業に支援協力して下った、ニッセイ緑の財団が組織のメンバーとして正式に加わり、資金面及び運営等を分担します。その他、ツリー・フリー・基金も資金面で支援することになっています。またりんご栽培の技術面では、福島のグループが技術指導の専門家派遣をサポートしてくれます。これが日本側の体制で、ネパール側ではSPCC(Sagarmatha Pollution Control Committee)が事務局となり、チャウリカルカVDC(Village Development Committee)での事業推進の役割を受持ちます。

当日の11月27日には、ニッセイ緑の財団から西、青山両氏、ネパールから大河原さんも出席され、佐藤伸一さんから現地協力組織・りんご園運営など現状報告がされま



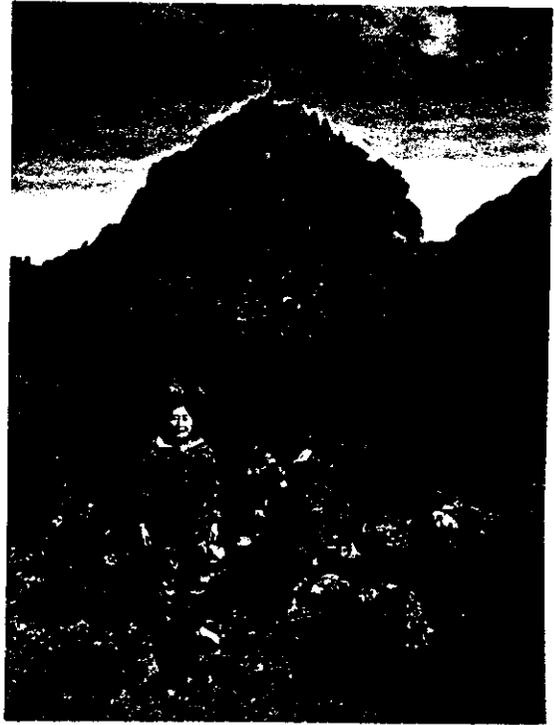
した。今年10月、木村太郎、平山まりさんの2人が今まで植えられた250本の苗木の生育状況の調査を行い、196本が順調に育っているとの報告がありました。また、去る11月17日にはネパール国有地借用の契約調印を無事終えたばかりの田部井さんより、調印式の報告がされました(現地紙"THE KATHMANDE POST"が大きく写真入りで掲載される)。北海道からこのツアーに札幌の高木さんが参加されました。ご苦労さまでした。来年2月の植樹ツアーの時には、250本植樹予定となっております。

アップル基金、植樹ツアー参加に皆様のご協力をお願い致します。(増子記)

パプアニューギニア・最高点ウイルヘルム山 (4508m)

真嶋 花子

日本から南へ 5,000km、南太平洋諸島ニューギニア島は、中央に高い山岳地帯があり、山あり海あり川ありの変化に富んでる地形。東部に位置する、中央山脈はウイルヘルム山を最高峰とするビスマルク山脈から、オーウェン・サタンレー山脈と連なり、4000mの高峰が連なる大山脈です。地上最後の楽園とも呼ばれるこの国の最高峰に登ろうと9月13日、ニューギニア国営航空機で関西空港から飛びたった。メンバーは、男性2人、女性8名、計10名(7名がHAT-Jの会員)。一昨年から飛ぶようになった週一便の直行便にはわずか50名ほどの乗客しかいない。これじゃ赤字だなーなど余計なこと考えていると6時間ほどで人口40万人の首都ポートモレスビーに着く。機中泊の寝不足で降り立った空港には、早朝にもかかわらず沢山の人がいる。1545年に来航したスペイン人が、住民がアフリカのギニア沿岸の黒人に酷似していることから「ニューギニア」と名づけられたと言うが、その容姿、色鮮やかな衣服といい、私はアフリカに来たような錯覚に陥る。空港近くの高級ホテルのプールサイドで朝食と休息をとり、国内線に乗り換え、一時間ほどでゴロカへ。乾いた大地の中に小さなローカル空港があった。さらにここから、小型バスに乗り換えて登山基地のケグルスグル(2599m)へ。乾期と異常気象で5月も雨が降らない道をバスは、埃をあげて走る。畑や野原の草も枯れていたが、ここは南国、野生のポインセチアは赤く、紫のブーゲンビリアは数メートルの大木、高貴な匂いをはなすジャカランタそして優しい花びらの合歡木など4時間のドライブは飽きることなく楽しませてくれた。登山者はほと



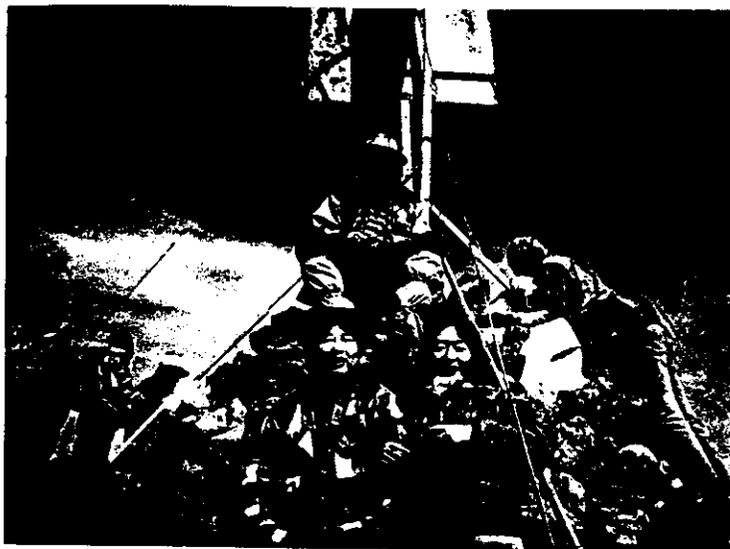
[山頂をバックに]

んど泊まるというゲストハウスに着いたのは夕方だった。ゲストハウスのまわりは、焼畑で開かれた畑に、カシーやスパティフィラムと一緒にフロロゴニーやニンジンなどの野菜が育てられていた。

9月13日、カシー、ニンジン、ホーターと台流し登山開始。最初はジーンズの湿原状の道を5時間登る。途中で見るハイナップルツリーのオレンジ色の花やチョウバク状の花びらのジャクサゲなど熱帯植物散策ルートのような登山道は高度が高くなると低灌木帯となり木陰がなくなり蒸し暑い休憩もままならない。そうここは、一年中高温多湿の熱帯雨林気候だった。定時きついで帰るが地元の人はおい

しそうに水を飲む。羨ましいが私たち外国人には飲むことができない。昨日登った英国人の登山者が降りて来て「ウイヘルムが火事で火は消えたが煙りでなにも見えない」と興奮して言う。しかし登山道は大丈夫なので登れるとのこと。不安と暑さの中、登りつづけると今日の目的地のピウンデ湖から流れでる白糸の滝が見えた。この滝の上の湖畔にある山小屋(3560m)が今夜の宿である。小屋の周囲には山火事消化のために登って来た男女そして子供たちが大勢。顔は泥で黄色や灰色に塗り、頭には野の花をさして大変おしゃれである。村のお祭のような雰囲気である。テントのほうが快適かなと思ってしまう小屋にシートを敷き数時間の仮眠。しかし、外では寝袋なしのガイドたち一晩中焚き火をしながら騒いでいる。

9月16日。午前1時出発。この山は陽が登ると暑いので御来光を頂上で迎えるとガイドは言う。ヘッドランプの明かりを頼りにジャングルの中を登る。一時間程で上の湖アウンデ湖である。ここから稜線に出る。急斜面の草つきを過ぎると岩稜をさらけ出した斜面に明瞭な登山道が続く。昨日までの山火事で草は真っ黒になり焦げ臭い。6時10分雲海の間から日の出を迎える。昼夜の寒暖の差が大きく気温はかなり低い。ガイドたちが焚き火をして暖をとっている。間もなく本峰の頂陵部岸壁の基部にぶつかる。そこを回り込むとボールに錆びた鉄板をくり付けたピークが見える。頂上直下の岩場を登り、8時40分頂上着。全員登頂。快晴。まわりの4000mの山々の眺望に感激。一時間程登頂の感激を皆で味わう。初めての4500m登頂に高山病でむくんだ顔に

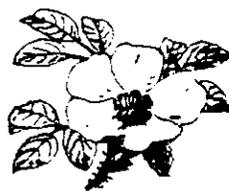


[頂上にて 道支部の坪原さんと]

涙する人もいた。すっかり陽が高くなって帰路はTシャツ一枚でも暑く、皆無口になる。ダウンジャケットを着て登った時が信じられない。

おわりに、まだ海外からの登山者も少なく山にはほとんどゴミはありませんでした。しかし小屋ままわりに登山者の捨てたゴミの山そしてひとつあるトイレは、快適といえずトイレ周辺は紙が撒らばり登山道からはずれると大便もあちこちに。暖をとるためや、炊事に使われる焚き火。これは、数年前のネパールと似てる。最後の楽園は手軽に登れる山もふくめ魅力一杯。いつまでも楽園であってほしいと願うのは外国人のエゴでしょうか。

道花



ハマナス

「青少年尾瀬国際フォーラム」に参加して 宮崎 初恵

“第6回国際交流青少年環境体験登山”が8月20日～27日に開催されました。尾瀬コースに、札幌から福沢益子さん、小野妙子さん、高木百合子さん、そして私の4人が参加しました。22日の夜は、尾瀬沼のほとりに建つ長蔵小屋でコンサートがありました。歌と語り、フルートとピアノの演奏は、周りの静かな環境に解けこみ、聞いている人の心を和ませてくれました。23日は、午前中は湿原を中心に自然観察会がありました。新聞の募集で集まった青少年の中に、富良野から来た高校生が参加しており、北海道の子の心意気を感じ、嬉しく思いました。午後は、尾瀬国際フォーラムが開かれ、エドモンド・ヒラリー卿の基調講演「高校生へのメッセージ」と、パネルディスカッション「山岳環境の実状と対策…大切な山を守るために」がありました。78才のヒラリー卿の環境問題や青少年に対してのメッセージを聞いて、私達自身も、これから何をすべきかを考えさせられました。そして11ヶ国の青少年が、楽しそうに話している姿に接し、自然を愛する心は、人種を越えた



共通のものだと改めて感じました。

私達は、20日に札幌を立ち、21日、会津駒ヶ岳に登りました。檜枝岐村で泊まった民宿では、夕食にサンショウウオの姿焼が出てびっくりしました。尾瀬フォーラムが終わった後は、燧ヶ岳と至仏山に登り尾瀬ヶ原を歩きました。8月下旬ということもあり、人が少なく、尾瀬の良さを十分に味わうことができました。

今回の旅は、国際交流会と尾瀬の自然とを楽しむことができ、有意義なものとなりました。

初めての尾瀬

小野 妙子

8月21日、羽田経由で檜枝岐村に入る。ミョウガの茂る、国道沿いの家々の苗字は、星、平野、橋、清水、安達しかみあたらず、又どの家の敷地にも、お墓が有る。

8月22日、朝4時50分、会津駒ヶ岳へ向かう。国道を横切るとすぐに、大きな葉でここでは山人傘（ヤマトガサ）と呼ばれる、ラワン露に似た群落に出会う。駒の小屋に向かう途中の湿原で初めて見るキンコウカが、辺りを黄色に染めていた。頂上に立ち、桧の大木の標識（写真）は2.5mもある。山頂から望む燧ヶ岳の天を突く高さには圧倒される。下山後はバ

スで沼山峠へ、ここからは木道を歩いて湿原に入る。深紫の lindoウが目に止まる。

昔の校舎を思わせる木造の長蔵小屋では、一人置一枚の8人の相部屋となる。

午後6時半コンサートと詩の朗読が始まる。

『伝えてくれ いとしい妻に 俺が 帰らなくても 生きて ゆけ と……』

心を打つ朗読に胸が詰まる。

8月23日、朝、談話室で夕べ朗読された新井さんに逢う。美しい彼女には山歩き姿が想像しがたく、つい「ここまで、歩いて来たのですか」と聞いてしまう。「もちろんですよ。

一番良い思いをしたのはピアノです。ヘリコプターで来ましたから。」尾瀬ヶ原には先人の努力による、観光道路はないのである。

尾瀬ビジターセンターで公園管理者から、木道は北アメリカのカラマツ材を輸入、国立公園の基本はリゾートだから、ゴミ、トイレ、湿原への踏み込みなど問題はあがるが、多くの人に尾瀬の素晴らしさを提供し、併せて自然の保護対策を考えて行く話がある。その後自然観察で若いレンジャーが、「森のいい匂いは、樹液の匂いで一種のハーブです。森を歩くと体も心もリフレッシュ出来るのです。森の好きなものそれは、水と太陽です。夕べ雨が降り、今朝陽が当たっています。ベストの状態の森を歩いて幸せです。」と話す。

フォーラムでは、長蔵小屋の主である平野紀子さんが歴史的経過について話され、尾瀬に対する理解を深める。富良野高校山岳部から参加した高畑くんは、ボッカさんに逢えたことが印象に残っていると話をしていた。環境庁の方からは、尾瀬のピーク時には1日2万人もの人が入り、東京銀座のようで25件ある山小屋には年間10万人が宿泊する。集中する週末は値段を高くし、少しでも平日へ分散させている。トイレの最大の問題である浄化槽の整備にも現在取り組んでいるとの話がある。

8月24日、朝6時、二泊した長蔵小屋を後にして、麓ヶ岳へ向かう。まだ穂先に花が残っているヤナギランの咲く丘、ここが平野長蔵氏を初めとする一族の眠る墓に立ち寄る。湿原を何度も振り返りながら高度を上げて行く狭い頂上に着くと、別のルートから登って来た人達で溢れていた。会津駒、男体山、磐梯山が見渡せる。真っ赤な実のハリブキの群落を見ながら尾瀬ヶ原へと下る。浮き島や池漕を埋めているヒツジグサを見ながら、やさしい風の中を歩く。

8月25日、朝5時10分、至仏山へと向かった。荒廃した登山道は今年8月に再開し、山の奥から登れるようになる。真新しい木の階段が



蛇紋岩の頂上近くまで続く。途中イブキジャコウソウやタカネナデシコに出会う。大きな露岩は三点確保で這うように登る。頂上に立つ四角い磨かれた石の標識から、至仏の名前のように墓石に見えてしまうが、この山とは仏教的な謂われはない。快晴の頂上からは360度の展望、下りも蛇紋岩特有の緑がかつたつるつる滑りそうな石がゴロゴロする道を慎重に下る。やがて砂礫の台地に出て、ようやく足元を気にせずに景色に目を移す。その時、不覚にも躓き眉尻に1センチの傷を負ってしまい、同行の三人に敏速に処置をして頂き、貴重な水でその場もきれいに洗い流して頂きリーダー初め皆さんに心から感謝している。自分の足で小至仏山を経て鳩待峠まで歩けたのは不幸中の幸いだった。帰途一時貧血のためか力が抜けたように眠かった。

初めて行った尾瀬と憧れの本州の山々。「夏の思い出」の歌を口ずさみながら何故かやさしい風と美しい自然ばかりに思いが巡り安らかな気分になれる。あれから3ヶ月、傷も癒えた。広い広い尾瀬も今はすべてが静寂の中にあるだろう。草紅葉も雪の下かも知れない。いつの日か又春に訪ねてみたいと思いは馳せる。

コロラド川の環境保護について

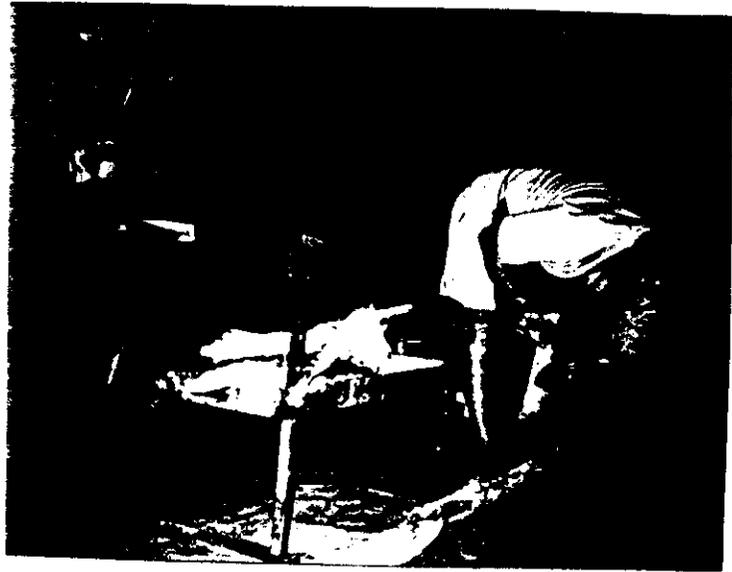
中西 律恵子

先日、HAT-Jから届いたニュースの中で、尾瀬の昨年の入山者数が65万人という記事を読んで、ふと2年前に訪れたグランドキャニオンを思い出していた。私がカヤックで下ったコロラド川は、年間1万5千人だったからである。

私は、10数年まえからカヤックに乗りはじめ、いつか地質学の博物館といわれるグランドキャニオンを蛇のようにぬうコロラド川を下ってみたいと思っていた。技術も気持ちも熟したころ、カヤックの講習を受けたことのあるアメリカのアウトドアセンターがツアーを企画していることを知り、参加することにした。

私が訪れたのは、10月中旬から2週間で、380キロをキャンプをしながらパドリング（舟を漕ぐこと）をし、途中ハイキングを楽しむという計画だった。参加にあたって資料やガイドブックを読んでいるうちに、コロラド川を下るには、いろいろな制約があることを知った。

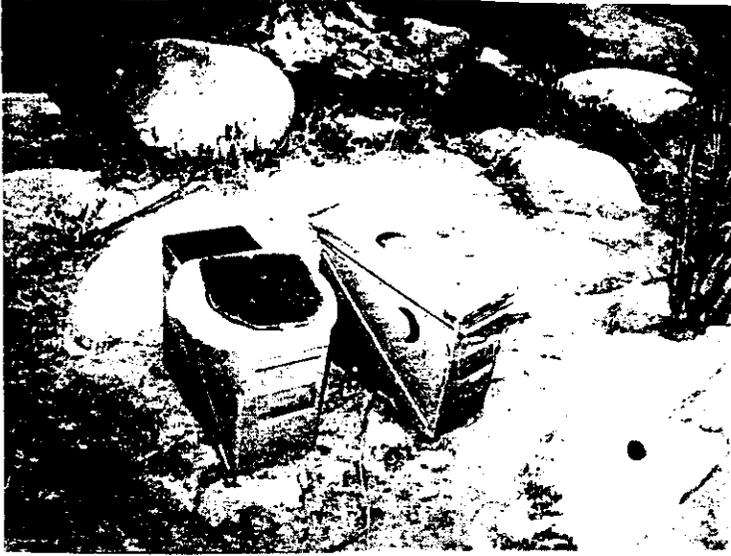
ツアーのほとんどが、営業権をもっているラフト会社が行っていて、もし個人的にコロラド川を下ろうとすれば、申込をしてから何年も待たなくてはならない。そして、人数制限がされていて、ラフトやボート、カヤックやカヌーを含め年間1万5千人の枠を設けていること。さらに、リバーランナーが集中する夏休みシーズンには、スタートする数を一日150人に決めていた。



スタートする直前に、パークレンジャーがライフジャケットなど個人装備、レスキュー道具やキャンプの共同装備のチェックを行い、またツアーリーダーに必要な情報を提供しているようだった。

コロラド川は、両岸が数百メートルの岸壁で、一度スタートしてしまうと、途中地上とアクセスできる箇所は一か所だけのため、チェックは入念に行われた。

参加者23人に対しツアーリーダーが3人、リバーガイドが5名、ガイドは共同装備や参加者の装備を運ぶラフト5艇を操作し、またハイキング時のリーダーであり、コックでもあった。スタートしてみると、この日、川へ出ていくのは私たちグループしかいないようだった。2週間を通して十数艇のラフトやボートに出会ったが、キャンプ地で、ほかのパーティといっしょになることは一度もなかつ



た。当然キャンプ地は決められていて、リバーガイドブックには収容可能なパーティの人数が記載されている。

グランドキャニオン国立公園では、「とるのは写真だけ、残すのは足跡だけ」が徹底されていると聞いていたので、環境保護についても私は大変関心があった。ゴミや焚火の灰はもちろんのこと、自分たちの排泄物もラフトに積んで持ち帰る。アモウカンを利用して、便座を上に乗せて用を足す。

アモウカンは、もともと弾薬をいれるために鉄でできた長方体のぶ厚い箱で、大小いろいろのサイズがあり、アメリカのキャンプでは防水用容器としてよく使われている。ちなみに「小」の方は、川辺で用を足すように言われる。コロラド川のように非常にボリュームのある川では、十分に薄められるということらしい。それに、アモウカンに液体が入れば、容器は重くなり取扱いが大変になるし、臭いやガスを押さえるために使っている薬品が薄まって、効果がなくなってしまう。

飲料水は、浄水器を使っているとはいっても、川の水を使用していたので、最初は抵抗があったが、ツアー中、水のせいで体調を崩

すことはなかった。ゴミについても、固形物は全部アモウカンに入れて持ち帰ったが、食器を洗ったときの洗剤や、ほとんど残ることはなかったが食べ物の残りは、ネットを使って固形物を取り除き、川に捨てていた。洗剤は、参加者にも石けんを使用することが義務づけられ、またコロラド川に達する支流の100メートル以内での使用は禁止されていた。

この他にも焚火は、まわりの植物に影響を与えないように足付きのトレイを使い、焚

火ができる期間も決まっていた。本当に、キャンプサイトが汚されているということは全くなく、壮大な大自然を仲間と共に心ゆくまで味わうことができた。

これには、パークレインジャーやリバーガイドが中心となって、自然を利用する人達に環境保護の大切さについて伝え、彼らが率先して活動していなければ現状を維持していくことは難しいと知った。そして、無制限に人を入れられないからこそ、この環境をいつまでも快適に味わうことができるのではないかと。誰でもが富士山や尾瀬に登ることができて、誰でもが楽しめるというのは、今だけのことを考えると公平なのかもしれない。しかし、ますます自然環境が先細りして行くなかで、次の世代に、私たちが感じた自然のすばらしさを残すことができるのだろうかという疑問になってくる。私が体験してきたことは、アメリカの国立公園の一部分で、アラスカでは違う方法を取っていたし、この他の地域ではどのような方法を取っているかわからないので一概には言えないが、少なくともきちんとして先を見据えて対策を取っていることはまちがいないと感じた。

山のトイレ考

梅沢 俊 (植物写真家)

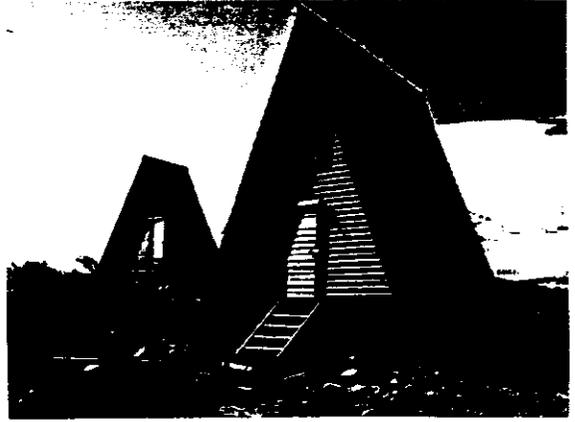
中高年を中心とした登山ブームのあおりを受けてなのだろう、山の環境汚染が深刻であるという。百名山登頂や旅行業者が一般募集するツアー登山などは、私が山登りを始めたころにはなかった新種の登山形態で、女性が多いのも特徴だ。だから人気のある山の汚染が特にひどい傾向があるのは当然のことなのだろう。

ここに道内の主な山岳の現状と対策を感じるままに報告してみよう。

〈利尻山〉深田久弥著『日本百名山』のトップに登場する山。関空から稚内への直行便が飛んでから西日本からの登山者が目立つ。鴛泊コースの避難小屋が 8.5 合目に建ったが、トイレがないので周囲のミヤマハンノキ林の下は汚染だらけ。地元からは「入山規制を」との声も出始めている。避難小屋に宿泊させないことに加え、樹林限界下にトイレがほしいところ。

〈大雪山〉表大雪と十勝連峰の主な登山口にはトイレがあるので、比較的クリーンであるが、問題はキャンプ指定地である。トイレのない裏旭岳と沼ノ原はロケーションからして指定を解除すべきで、代わりに沼ノ原登山口にキャンプ地とトイレを望みたい。トムラウシ山南沼と美瑛富士のキャンプ指定地に関しては妙案が浮かばぬが、トイレはあった方がよい。東・北大雪の山は日帰り登山が主体なので登山口にトイレがあれば汚染は随分防げらると思う。人気のニペツツ山にはトイレができて登山者に喜ばれているので、他の山にも望みたい。

〈夕張山地〉女性登山者が多い夕張岳の登山口にトイレが建てられてから周囲の環境は見違えるように良くなった。ただし登山時間が



天塩岳尾根頂上の避難小屋とトイレ

長い山なので石原平辺りにトイレがあってもよさそうだ。

〈日高山脈〉登山者が少ないが登山口にはトイレがほしい。ただアポイ岳は、例外で、登山者数は他の山の比ではない。小中学生の遠足登山、募集ツアー登山など数十人の団体登山も珍しくない。5合目にあったトイレが撤去されてから付近の汚染が目立つ。是非復活を。

〈阿寒・知床・道東の山〉ほとんどの山の山麓にはトイレがあり、山上の汚染は目立たない。

〈増毛山地〉雨竜沼を除いて登山者数は多くない。雨竜沼の登山口では“環境美化協力金”なるものを徴収しているが、大きなトラブルはないようだ。

〈北見山地〉天塩岳登山に対する朝日町の理解度は並大抵ではなく、登山口に山小屋 2軒、山上に避難小屋とトイレが建っている。ただし、樹林限界を越えた尾根上の構築物は景観を損ねる場合が多い。

〈道南の山〉狩場山、恵山、駒ヶ岳といったメジャーな山の登山口付近にはトイレがあるが、その他の山にはない。入山者数が少ない

のでまあいいか。

〈道央圏の山〉ここもニセコ、羊蹄山といった人気の山は問題少ないが、札幌市近郊の山にはトイレが少なく、相次いで建設されるデラックスなスポーツ施設とのギャップの大きさに啞然とさせられる程である。特殊な例外として、再建された手稲パラダイスヒュッテには土壌菌による浄化槽が設置され、快適な水洗トイレが使える。これは電気が利用できる恵まれた環境を活かした例である。

武利岳クリーンハイク報告

長屋 栄一

紅葉も終盤となった9月20日～21日、北海道支部今年3回目の清掃登山が行われました。武利岳は大雪山群の北に位置し、武華岳、ニセイカウシュベ等と共に北大雪に含まれています。8合目から上部は大雪には珍しい鋭い岩稜があり、個人的には私の住居からも近く好きな山の一つです。

参加者は遠く札幌からが一番多く10名、地元網走管内から5名、旭川から1名の総勢16名(1名21日のみ)の参加を得、とりあえず人数的には体裁が整いました。ローカルで初めての行事、今まで全て事務局任せで、参加するだけで気楽な立場でしたが、企画・案内・集約と準備を進めている間は、当日の天気、参加人数等の心配もし、参加者が少ない場合はミニクリーンハイクと名称変更を考えたものでした。

20日は丸瀬布森林公園キャンプ場に集合、バンガロー泊まり。宮崎支部長の挨拶、自己紹介の後、増子さん用意の鍋料理で大いに盛り上がり、必要以上の懇親を深めました。

21日、天気予報は味方してくれませんが、まずはバンガローを後に武利岳登山口に車で移動。サブリーダー松本さんの指導により準備運動後、若干の注意事項を伝え曇り空の下、雨がおちないことを念じつつ8時出発。2合目

トイレは登山者(特に女性の)にとっては身近で切実な問題である。水分補給や排せつを我慢して体調を崩すことすらあるのだから。

かつてドライバーがトイレの少なさに泣かされた時代があったが今は豪華さを競うようなトイレが乱立する時代だ。登山者も関係機関に働きかけていかねばならない時だと思う。自分自身のためばかりでなく、環境保全のためにも。

から6合目辺りは残り僅かな紅葉の尾根筋を楽しみ、8合目からは岩を攀じる武利岳のハイライト、大雪らしからぬ尾根を抜け、予定通り3時間半で頂上着。初めての人、久しぶりの人、よく来る人、皆大喜び。眺望はきかないが以外と暖かくまずまずの出来でしょう。

帰路も少ないゴミに目を凝らし2時間30分、無事登山口に到着。最後に杉林総括リーダーの総評にて解散……のはずでしたが、帰り道、何度も車を止めては五十嵐さん扇動?先導によるキノコ狩りのオマケつき、本当にお疲れ様でした。

武利岳はいつ来てもゴミが少なくきれいな山で、清掃登山に似合わない?ところかも知れません。血眼ななって集めた清掃活動の結果は、全部で買いもの袋半分程度、タバコの吸い殻、スポーツドリンクのキャップ、キャンディーの包装紙等の小物が多く「ついうっかり」からと思いたいものです。

山登りの楽しみは静けさと、ありのままの自然に浸る喜びにあると思います。本来の楽しみを取り戻すために、日頃からゴミを拾うことが習慣となっている皆様ですから、今回はクリーンな山を楽しむハイキングでいいんじゃないでしょうか。

武利岳清掃登山に参加して

伊藤 ナカ子

私には恩師である杉林さんの車に便乗させていただき、十五時半札幌を後にする。男性二名、女性四名で、にぎやかにおしゃべりしているうちに、丸瀬布いこいの森に到着。北見、網走、常呂、そして札幌からの先着組が歓声をあげ迎えてくれる。暖かい雰囲気ですぐ馴染み、皆さんが忙しい折りに準備して下さった、山ほどのご馳走をつぎつぎといただく。

素敵な山屋さん等の話は楽しい。あっという間に時がたつ。明日の体力のことを考えて、少し早めにシュラフにもぐる。

五時半に起床して寝ぼけ眼で外に出ると、濃霧がたちこめ、森林に囲まれて冷気が心地よく、体がしゃんとする。北見の皆さんが用意して下さった朝食をご馳走になり、増子さんの心を込めてにぎって下さった、おにぎりをいただいて、いこいの森を出発する。登山口近くの神様の水をご馳走になり、元気いっぱいに登り始める。紅葉の真ただ中をひたすら登ることに専念する。体力のない私は限界まで頑張らないように気をつけている。

無駄な努力をして怪我でもしたらかえって、皆さんに迷惑をかけてしまう。これも師匠に教えられたことだ。マイペースを崩さないこと、休憩時間を少なく歩き、体力に余裕を持つことを思い出しながら登る。

森林帯が切れた所で大休止する。ガスが切れて、海のように波だった紅葉が視界に入る。これからは本格的な登りなる。ハイマツ漕ぎ、岩場歩きに邪魔になるストックを長屋さんが持って下さる。風も強いので這って歩く。ガスが濃く眺めがきかない頂上に、十二時半に到着する。頂上は今にも泣きださんばかりに



かすんでいた。全員で記念写真を撮る。北見の方が晴れているとオホーツク海が見え、反対側には表大雪の山々が見えると説明がある。展望出来ないのが本当に残念だ。昼食を取り寒いので十三時下山につく。七合目近くまで下ったらガスが切れて展望が開けて、広がる紅葉が美しい。ナナカマドの赤い実がダケカンパによく映える。カエデの黄金色のアーチをくぐり、黄色い落ち葉に敷き詰められた山道を歩くなんて、なんと素晴らしいことだろう。幸福感でいっぱいになる。毎年変わりない姿を見せてくれる大自然だが、それを見る私の思いは年々変わっていく。来年もまたこの美しさに巡り会うことができるだろうか？汗を流してここまで登ってきた者だけの喜びだ。後のことはいい、今が一番幸せならそれでいい。

自分の非力も省みず、世界に連なるHAT-Jに入会させていただき、素敵な山屋さんたちとも出逢い、世界最高峰登頂の田部井さんに会えてとても幸福です。去年は月山、会津駒ヶ岳今年は何妻山で清掃登山に参加させていただきました。楽しい山仲間と一緒に大自然を満喫できました。この度の清掃登山は

若い皆さんが、ゴミを拾い私は付いて歩くだけでした。松本さんにアイヌ語を教えていただいているうちに登山口に着きました。何のトラブルも無く全員快適な山行を終えることができたのも各リーダーのおかげであること

を深く感謝して、閉会式を済ませました。丸瀬布名産のえびす南瓜に大根をおみやげのいただき、木登り名人の取って下さった柳茸もたくさんいただき、皆様に感謝して丸瀬布に別れを告げました。

無意根山清掃登山

杉林 仁止

無意根山、1460.5メートル。

春遅くまで残雪があり、札幌近郊ではもっとも雪の多い山である。それだけに、天然林、湿原、沼などは美しく、感動的な素晴らしさをあたえてくれる。

頂上からの眺めも良く、余市岳、定山溪天狗岳、空沼岳、札幌岳をはじめ、遠く羊蹄山、ニセコ、暑寒の山など 360度眺められる。東側が急斜面になっていて、6月下旬から8月上旬頃まで花の季節でもある。山の中腹は、エゾマツ、トドマツの針葉樹、シナ、イタヤカエデ、ダケカンバなどの広葉樹林帯となっておる。標高1000メートル付近を森林限界として、ハイマツ帯となっている。秋ともなれば、緑の針葉樹、広葉樹の紅葉がとても美しい。

10月も中旬になると、山頂には初霜が降り夏山から冬山へと変わる。無意根山は、特に山スキーには絶好の山で、樹氷が美しく、北大の無意根尻小屋もあり、四季それぞれに楽しめる山である。

7月6日(日)。新緑の美しい豊羽元山へと車で札幌市営の無意根山荘へと向かう。前日の雨もあがり良い天気で登山者は50名位グラウンド前に集まっていた。HA T-Jメンバーは9名、ゴミ袋を渡し無意根山荘の管理人の方に挨拶に行き、本日の日程を話す。グラウンドの横を通りぬけると、標識のある登山口、笹の葉や、木々の青々とした香りの中をゆっくりと登る。いろいろな草花に、心がはずむ。ゴミも少なく札幌近郊の山とは思



えないほど静かな山である。

やがて針葉樹林となり、汗ばむ頃、後を振り返ると、木々の間から余市岳が見える。

標高1000メートルぐらいから急登になりもう少しで千尺高地、ここから平坦な稜線が残雪をのこしながら山頂へと続いている。

千尺高地からのなだらかな道を下ると、笹を切り開いた広場に出る。切株があって休憩所になっている。この休憩所はでもゴミは少なく、軍手、タオル、ビニール袋、オニギリのアルミが目につくが少量である。

青い空、白いダケカンバ、ネマガリダケの緑、所々に残雪があり、無意根山をよりいっそう美しく引き立てる。羊蹄山は雲の中で見えないのが少し残念。

稜線の西側を登って行くと、いよいよやせ尾根、急斜面となって、東側斜面の下には無意根尻小屋、西側斜面の下には、大沼が見える。登山道は細くなり、ハイマツやナナカマドの木々の中を注意して登る。シラネアオイ

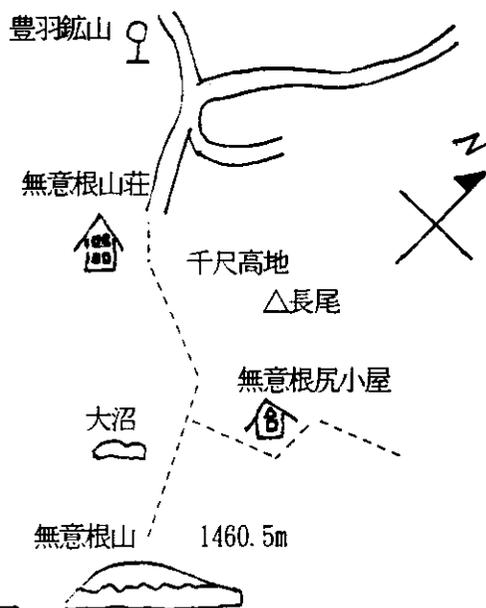
などの花も美しい。

山腹を横切るように進むと、薄別コースとの分岐点となる。帰路の道をたしかめるよう注意する。

山頂に続く尾根の東側には、札幌岳や空沼岳（第1回HAT-Jの登山会の山）が見える。快い風を受けながら、ゆるい登りを南へと進む。ケルンの積まれた山頂だった。

登り7キロ、3時間半の行程は、札幌近郊では余市岳に次ぐ高さを誇るだけに、魅力的な山であった。

ゴミ量5キロ、この中にはビニールのカッパの上着が入っていたのでキロ数がふえる。多数の登山者にもかかわらずゴミの量が少ないと思った。



「木下小屋」

法量 武

知床で唯一の山小屋「木下小屋」を預かる者として復旧再開10周年、改築5周年という大事な節目にあたり小屋の歴史を振り返ってみることにした。

幸い手元に「木下弥三吉記念会」発行の小冊誌「知床日記」があったので目を通すと、木下弥三吉氏ご本人の一文があり「木下小屋誕生」までのいきさつが詳しく述べられているので、私が臆測で語るよりも原文をそのまま読んでもらす方が最善と考え採録させていた。

「木下 彌三吉

約30年まえ、原忠平氏と知床の山々を歩きし縁にて同氏のすすめで敗戦後の昭和3年より奥地森林の開発を目指し、ここ岩宇別の清流に臨み造材事業所を建て、森林の伐採とラウス岳への登山者の便を計り10年を既に経る。爾来幾多の著名なる学者の宿泊ありて、知床の感想を記せらるるは本事業所の光栄であり、

かつは良き思ひ出でもある。

今、本事業所を閉鎖するに当りて、感激まことに深きものあり。されど当所に宿泊せられし方々も時にふれ思ひを寄せらるることを信じ、また本書に記せられし厚意を謝す。

時は秋深くして落葉しきりなり。低徊去るに忍びざるも是非もなし。

さらば溪流よ、山々よ。美しき相を永く保てかし。

ここに知床訪問帳を閉ず。 33.10.26

造林事業を終了して現地を引き上げる前に書かれたものであろう。格調の高い文章で知床の山々や小屋への思いが切々と語られている。この頃は事業所を別名「岩尾別小屋」と呼ばれた記録もあり、私も北見山岳会の仲間とお世話になったものである。

翌昭和34年の夏に初めて「木下小屋」の名称で紹介されているのでこれも原文のまま採録する。

「木下彌三吉

本事業所の閉鎖にあたりまして皆様より嬉しいからぜひ何らかの方法で残すよう、すすめられまして、特に北見営林局の皆様の御厚意で木下小屋として再発足できましたことは何より嬉しい次第です。今後は登山者のための良い小屋として皆様の御期待に添いたいと思います。34.9.20」

「木下小屋」誕生までの経緯については、この二文で全く説明を必要としないのだが私はあえて前文の最後を再採録する。

「……時は秋深くして落葉しきりなり。低

徊去るに忍びざるも是非もなし。さらば溪流よ、山々よ、美しき相を永く保てかし……」

知床をこよなく愛し「木下小屋」わ登山者のためのな惜しみなく頒ちあたえてくれた木下彌三吉氏は翌昭和35年1月8日急死されたのです。

ここに偉大な故人を偲びご冥福をお祈りしてあらためて「登山者のため良い小屋」をと願った氏のご遺志を大切にして、知床の山小屋「木下小屋」わ守っていきたいと思います。

(小屋閉まいをして)

HATの行事に参加して

「田部井淳子代表と共に旭岳清掃登山」

岡花 博文

平成9年6月29日(日)、「HAT-J北海道支部主催」の旭岳清掃登山会に「大雪山国立公園パークボランティア(PV)」も協力参加するために、前日旭岳の子察に入った。大部隊をゆっくり案内することを考えて、休まなくて良いペースで、上り3時間。下山は講演に間に合わせるために多少急いで13時に姿見駅に着いた。このままロープウエーで下山すれば、田部井代表の講演「エベレストの向こうに見えるもの」に十分間に合うと計算通りであったが!

駅の様子が何かおかしい? 停電でロープウエーが停まっているのだ。1時間待っていても動きそうにない、諦めて徒歩で下山し東川会場にかけつけたが16時丁度、講演が終わりぞくぞく会場から人が出てくる。

登山以上に楽しみにしていた講演を聞けなことは……

また旭岳温泉に引き返し、宿泊のえぞ松荘で田部井代表を囲んで夕食会と交流会に合流する。

さて、翌29日旭岳温泉の朝、旭岳の勇姿が



くっきり絶好の登山日和になる予感がする。例年、6月最後の日曜日は大雪山の山開きである。一般の登山者に混じって、6時からHAT一行70名の「旭岳清掃登山隊」が、続々と乗車し姿見駅に集合する。

姿見駅を6時30分登山開始。PV参加者を先頭にゆっくりペースで旭岳山頂をめざす。永年のクリーン大雪運動のお陰もあってゴミは少ない。しかし、トイレ問題には頭を悩ます。このコースは隠れる場所も難しい。山頂で記念写真を撮り間宮岳を通過し、お鉢の中岳分岐で風を避けて昼食にする。

この間、高山植物の花々が続く、このところの好天で開花が例年より1週以上早く、7月に入ってから満開になるイワウメも既に盛り。田部井代表が花の写真を撮りながら軽やかに動きまわる姿も印象的だった。

この後、中岳温泉、裾合平の大雪山を經由し無事姿見駅に戻り、ロープウエーで旭岳温泉に下山し解散式を行う。田部井代表の「清掃登山というのはイメージが良くない、ホウキで掃除するのかわかるとか思われたりする。これからの若い人達に、自然の素晴らしさを見てもらうついでに、自然の大切さや保護の啓蒙をしなければ・・・」とのお話もあった。

山を愛するHAT-J並びに山仲間のみなさんありがとうございました。大雪山PVの仲間を代表して連帯の挨拶とお礼を申し上げます。

以下、紙面をお借りして、「大雪山国立公園パークボランティアの活動について」紹介させていただきます。

北海道の屋根、大雪山系は特異な動植物体系から山岳景観・地質構造に至るまで、北海道が世界に誇る自然学術遺産である。中高年の登山や百名山ブームで、道内外から訪れる人が年々増え続けているが、一方で心ない自然破壊も少なくない。この貴重な自然を守るため、「大雪山国立公園」全域の清掃、自然保護パトロールやネイチャーガイドなどの奉仕活動を続けているのが、「大雪山国立公園パークボランティア連絡会」である。発足は平成元年、活動も年々活発になって、今では全道各地から100名を擁するまでになり、年間活動日も一人平均6日間にもなっている。会としての主な行事は、

5月：総会で年間活動を決定。

6月：大雪山には天然記念物の高山蝶が4種いるが、ウスバキチョウなど大雪山にしか生息しない稀少種もいて絶滅が危惧されている。これらが飛び立つ6月中旬の密猟防止パトロールから活動を開始。

7月：初旬、まだまだ多い残雪を踏みしめ、遭難防止も兼ねて最高峰の旭岳やトムラウシ山周辺の登山道・野営地整備（保護ロープ・標識ペンキ・清掃）や避難小屋の清掃を行なう。トムラウシは2泊3日のテント泊。

8月：初旬、国立公園クリーンデーにおける清掃活動。

9月：初旬、トムラウシ山・ヒサゴ沼の保護ロープ撤去と清掃活動。

中旬、登山者が殺到する9月の紅葉時には、大雪高原温泉「沼巡りコースのひぐま監視パトロール」に参加し、登山者の安全確保に協力。

下旬、旭岳周辺の保護ロープ撤去と最後の清掃活動。

以上の他、シーズン中やオフに研修会を行い会員の資質を高めているが、この間、私たちの指導をしてくれるのが環境庁の管理官（レンジャー）である。神奈川県と同じ広さを持つ、わが国最大の国立公園にたったの6人彼らのご苦労も大変なものである。

2,000m級の山並みが続く大雪山系は、緯の関係で気象などの厳しさは本州の3,000m上と言われるが、過去事故もなく安全で楽しい活動を続けさせてもらっている。しかし会員の平均年齢が49歳、あと5年もすると含めて60歳以上が3割にもなる。来年度10周年を迎えるが、今、記念行事の一環として、このかけがえのない大雪山の自然を守って行く、後継者養成のための募集をしなければならないと考えている。

(大雪山パークボランティア事務局長)



アカエゾマツの年輪

池永 魁次

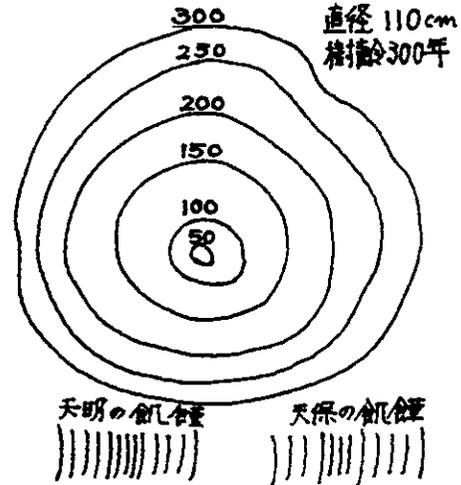
アカエゾマツは北海道の木。全道各地の樹海の主である。ピジターセンターに樹齢300年のアカエゾマツの展示物があるが、入館者はさほど興味を示してくれない。だから年輪から何を読み取るか、その見方を書きます。

300も年輪を書くわけにもいかないので、50年毎スケッチしたのが右図であります。芽が出て50年までは、年輪を数えるのにルーペを要します。密集していて茶色で固くしまっています。左に15mm右下方向に20mmしか成長していません。これは、栄養分の少ない土地か溶岩などの上に生え、周囲に大木があり光を十分に受けられない過酷な条件にあった事を示しています。また、卵型に右下方向に径が長いのは、傾斜地に生えていたと言えます。100年から150年にかけては、上と右方向に急速に伸びて行っています。幼木の時には年輪巾が0.3mmであったのに、この期には、3.1mmと広がっているのです。幼木の頃は大地にしっかりと根を張り、ぐんぐんと伸びる準備をしていたのです。周囲の樹が倒れて、日光の当たりが良くなった事も影響していると思います。人の成長とも似ていますね。20才半ば迄は、ひたすら勉強して後の人生で大きく伸びるのに備えていますのと。

実物が眼の前に無いので、細かい数字を並べてもピンとこない面もあると思いますが、次はスケッチをよく見て下さい。この樹は径が1m10cmで樹齢300年。山に有る時は、恐らく樹高35m以上あって森の中でも他を圧する存在であったかと思います。何時伐採されたかは当時の関係者に聞いても定かでなかったので、さらに念入りに年輪を調べて見ました。年輪は気象の歴史を残しています。

1782年～85年に「天明の飢饉」があり、津

アカエゾマツの標本



軽藩では20万人の餓死者が出ました。さらに、1833年～36年に「天保の飢饉」が追打ちをかけました。各地で一揆や乱が起り、幕藩体制の崩壊を促進しました。この状況が年輪に刻まれています。「天明の飢饉」の天候不順は、この樹の樹齢117年～20年にかけての年輪巾が4mmです。これに対しこの前後の4年間は、それぞれ6mm、8mmとなっています。

「天保の飢饉」については、樹齢168年から71年にかけての4年間の年輪巾が6mmに対して、この前後の4年間はそれぞれ、7mm、8mmとなっていて、明らかに天候不順（主として冷害で日照不足と低温）で成長が鈍化した年であることが分かります。この年輪巾の事実と300年の樹齢とを合わせ考えると、この樹が旭岳山ろくのピウケナイ沢で伐採されたのは1965年（昭40年）と推定出来ることとなります。

年輪は、白い部分が春から夏にかけて成長した所で、茶色の部分は夏から秋にかけての

ものであります。植林した樹は、初めから樹間を広く取っているのです、年輪巾は芯の部分でも広く同心円状になっています。原始林の樹は、周囲の様々な影響を受けて成長しているので、入林の折りに切株など調べて見ると、樹の成長の過程が分かって面白いと思います。ひいては森の役割、森の大切さの理解に役立ちます。

古来、日本には木の文化があります。木を

建築や木目を生かして家具や調度品、さらに芸術に用いて来ました。その為に失った森は植林により再生を計って来た技術があります。現在問題となっている地球温暖化の元凶、二酸化炭素の減少にも樹は積極的な役割を果たしています。樹を育て森を甦らせるのは、長い年月と技術を要しますが自然保護の原点になるのではないのでしょうか。

林田 正幹さんを偲ぶ会に出席して

増子 麗子

発起人のメンバーを見ると、私の様な者が顔を出しているのだろうか?と思いHAT-Jの事務所に電話を入れると「そんな事気にせず、これならぜひいらして下さい」との言葉を掛けていただいた。

95年のHAT-Jの新年会に参加すべく、何も分からず初めて東京へ行った私に、親切にして下さり、また、北海道支部設立にご尽力いただきましたのに、お世話になったままのお別れになってしまいましたので、偲ぶ会(9月11日)に出席する事が私がお返し出来る唯一の事なのかも知れないと思い、出席させて頂く事にしました。出席の返事を出すと、林田さんの奥様からお電話を頂き、ぜひ泊って下さいとの事、奥様には初めてお会いするし……。チョットずうずうしいかな、などと躊躇していると、再びお電話を下された。これも林田さんが導いて下さった何かの縁なのかも知れないと思い泊めて頂く事にした。新しい大きな家の窓からは、お天気が良いと富士山が見えるそうです。(あいにくこの日は見えませんでした)

ご長男が障害を持っておられるとの事で福祉の方にも力を入れられているお話をうかがい、うなづけました。人を思いやりいつもニコニコと優しい方でした。また、次男の正義



さんの奥様は旭川の方とお聞きし親しみを感じました。正義さんが笑った横顔が林田さんによく似ています。アイランドビーク遠征のビデオを見せて頂きましたが、ホースのイベントの中で最後にビデオに向かってニコッと笑われた姿が印象的でした。

偲ぶ会に出席して、林田さんの素直な人柄にふれる事が出来、改めて林田さんが亡くなられた事が残念でなりません。林田さんが導いて下さった人との出会いを大切にし、北海道支部の絆を強く、今後とも活動が盛況で行ける事を願っています。

林田 清子様からの手紙

寒中御見舞申し上げます。

北海道支部からの“しれとこすみれ”の創刊号を、お送り下さりまして、有難うございます。そして、主人の追悼文まで載せて戴きました。誠にうれしく思います。早速主人の仏前に供えさせて戴きました。

主人は、会社を退職後は「山、人生で、一生を終えられたら、どんなに幸せかしない。そのようにして行きたいから理解してほしい。」とよく言っておりました。

ヒマラヤも三回目の挑戦でしたし、無事に元気で帰国するものとばかり信じておりましたのに、とても残念でたまりません。私も、カトマンズからタンボジェ迄ヘリコプターで行き、最後のお別れをして参りました。ヒマラヤ連峰は想像を絶するもので、その時、

山の魅力、そして、山の方々の素晴らしい人間性に触れ、主人の気持が、わかった様に思います。

この度は、山の関係者の方々には、すっかり御世話様になり深く感謝しております。

この十五日には、早いもので、百ヶ日を迎え、東京浅草の法元寺にて法要をする予定です。私も今のところ健康に恵まれ、元気しております。これからは、主人の山の写真の整理を少しずつでもして行きたいと思っております。

北海道はどんなにかお寒いのでしょうか。どうぞ、御元気で、山の活動をして下さいませ。生前、お世話様になりましたことを感謝致しております。有難うございました。かしこ

追記：この手紙は昨年支部会報『しれとこすみれ』創刊号に、「追悼 林田正幹氏」と題して追悼文を書き、つたない文章と思いながらも哀悼の意を込めて林田さんの奥様に送らせていただき、その御礼の手紙です。日付は消印により「国立9.1.13」となっていました。支部の一部の会員には、会合時に紹介しましたが、会報第2号に掲載させていただき皆さんと共に再度哀悼の意表したいと思います。私個人宛の手紙となっていました。内容は北海道支部の皆様宛と思われましたので奥様には無断で掲載させていただきましたが、失礼を衷心より御詫び申し上げます。（花島記）

北海道支部新年会のご案内

北海道支部の新年交流会を、下記の通り行いますのでご案内致します。出席の方は事務局まで連絡下さい。TEL:011-737-9558

日 時：1月17日(土) PM7:00~9:00

場 所：「つる」札幌市中央区南1条西5丁目日住金ビルB1

電話011-231-8357

会 費：3,000円

編集後記

◆『しれとこすみれ』第二号をお届けします。原稿及び写真をお寄せいただいた皆様に深く感謝いたします。梅沢俊氏には、特別に寄稿『山のトイレ考』をよせていただき、貴重な報告と提言本当に有り難うございました。大雪ボラ連の岡花氏をはじめ皆様のご協力により昨年にも増して盛り沢山な会報になり喜んでいきます。

◆『百名山早登り競争』昨年あるスポーツメーカーの宣伝のために、百名山早登りが実施された。マスコミも折りからの百名山ブームにのって取り上げ、宣伝効果の思惑はスバリの的中した。これにより百名山は商業的に利用できることが立証された。かくして、早登り競争は始まる、今年ニュージーランドの山岳登山家 2人によって、78日間に塗り変えられた。その後すぐに栃木の47才の男性によって76日間にまたもや短縮された。一方、おそ登りでは函館の小学校の先生(38才)が、27年目にして達成しその記録を小冊子にしたと朝日新聞が12月 8日朝刊で報じている。年平均四座近く登らないと間に合わない計算になる。人によっては27年間でも、早登りと言えるかもしれない。はたして、深田久弥はこの競争をどう見ているだろうか。

◆『森はよみがえる』(石城謙吉著・中公新書94年刊)を最近読んだ。著者は前北大苫小牧演習林長で専門は動物生態学。近代日本とりわけ北海道の森林の変遷を知ることが出来、自然環境を考える上で参考になった。エゾシカ増加に従い駆除する話が出ている。道内総生息数8万頭、プラスマイナス4万頭と言われる。針葉樹の森林が拡大し、エゾシカがこの針葉樹林のなかで雪の少ない冬を過ごせることが増加の一因とも言われる。戦後林野庁は「林種転換政策」、天然広葉樹林から歩留まりのいい針葉樹の森へと次々換わりエゾシカは増えて行った。森は換えられ、エゾシカは殺戮される、これらすべて人間のなすわざなり。

◆『HAT-Jって何?』とよく聞かれる。山のゴミ拾いだけの団体ですか?会員の方でもはっきり分からない人も分かっている人も是非お読み下さい。“HAT-J NEWS”10月20日号、エトモンド・ヒラリー卿が高校生に送ったメッセージと江本嘉伸氏によるインタビューの文章です。「今世紀人間は全ての生き物の中で、最大の破壊者である」と言いきる。だから何をしなければならぬかをヒラリー卿は力説し、この言葉の中に我々HAT-Jの目指す方向を告げている。

HAT-J北海道支部だより 第2号

発行日	1997年12月20日
発行所	札幌市北区北37条西5丁目1-32 〒001 花島書店内 HAT-J北海道支部
TEL & FAX	011-737-9558
発行責任者	宮崎 初恵
編集責任者	花島 徳夫 増子 麗子